

【誘惑の笑み】

紫楼 巧

【1】

どうしてこんな事しなくっちゃいけないんだろう……。

ナース服のスカートから膝を覗かせて、美樹村 麻美が診察台に上がった。

もうしわけ程度にしかクツションが入っていない、固いベッドの上で四つん這いになると、この診察室に呼ばれてからずっと感じていた不安が、胸の中を占領してしまうぐらいに大きくなった。

隣で机に着いている外科医の村瀬 美佐子を見る。

「あの、先生、いったい何を……？」

美佐子が、診察机から座った椅子を引き出して、麻美に向き直った。

少しエナメルがかった濃いグリーンタイトスカートから伸びた脚を組むと、三十路を目前にした熟れた太股の奥に一瞬だけ赤いショーツが覗き、羽織った白衣の下で芥子色のセーターが、たつぷりとした量感の乳房を浮き上がらせる。

「あら、まだそんな恰好してたの。私が言ったのはそうじゃなかったでしょ」

その声は冷たく機械的だった。だが、口元は笑いの形に歪み、美しく整ったアーモンド型の目は、その奥に、小猫を虐めて喜んでいる子供のような光を湛えている。

また不安がつのった。

外とカーテンだけで仕切られている出口に目を向けても、診察時間が終わっている病院の待合室は、照明も落とされて薄暗く、当然、そこには誰もいない。

「どうしたって言うの、早くしなさい！」

苛立ちをはじめている美佐子の声が、麻美を突き刺す。病院の中での医者への命令は絶対だ、去年卒業した看護学校でも、その事は繰り返し教えこまれている。

再び口から出そうになった言葉を押し込んで、麻美が片手を自分の腰に持っていく。スカートをとくし上げようとすると、やっぱり覚悟が決まらない。

「いい加減にしなさいよ、まったく何をやってるの！」

怒りをあらわにして、美佐子が椅子から立ち上がるようにする。

「すみません、先生。あの、実は私……今生理中で……」

自分でも顔が赤らんでいくのが分かる。

だが、美佐子が次に言った言葉で、そんな事など脳裏から消し飛んでしまった。

「へえ、そうなの。良かったじゃない、妊娠しなかった証拠だものね」

麻美が美佐子を凝視する。

「何よ、そんな驚いたみたいな顔して。貴女この前、平尾先生を誘惑して抱いてもらったんでしょ」

「どうして……？」

口からはそんな言葉しか出てこなかった。

今年、病院に赴任してきた平尾 清二は、インターンを終えたばかりの、まだ新米の内科医だった。

若い医者は看護婦のアイドル的な存在になりやすいものだが、加えて、どこか頼りなさを感じさせる容姿の彼は、元々選んだ職業的にも保護欲が発達している彼女たち、取り分け、若い看護婦たちのあいだでは評判になっていた。

そんな平尾が、麻美を誘ってきたのは三日前の事だった。お決まりの食事と酒。普段飲みなれないワインの酔いも手伝ったのだろう、その夜の内に麻美は平尾に処女を捧げてしまったのだ。

——でも、どうして、美佐子先生がその事を知ってるの？

「ふふっ、貴女、他の子に話したでしょう」

含み笑い混じりのからかう口調で、美佐子が言葉が続ける。

「嘘 私、そんな事——」

言った途端に、言葉が途切れた。

良く思い返してみると、あの夜、看護婦寮に戻った後で、同室の伊藤 薫にふざけ半分に問い詰められたのを憶えている。門限など破った事のなかった麻美が、しかも普段飲みなれない酒の匂いをさせて帰ってきた事が、彼女の好奇心を誘ったのだろう。

もちろん、はつきりとは話してはいない。だけど、自慢したかったのも事実だ。濁した言葉の中に何かを嗅ぎ取られたのかもしれない……。

「——だから検査してあげなくっちゃいけないでしょう」

うつむいて黙り込んでしまっていた麻美が、再び聞こえてきた声に顔を上げ、美佐子に視線を向ける。今の言葉がよく理解できなかったのだ。

「性器の検査よ。処女だったんでしょ、きつと膣口とかが傷付いてるはずだものね」

「そんな！」

あまりに馬鹿馬鹿しい美佐子の言葉に、麻美が診察台から下りようとする。

「待ちなさい！」

鋭い女医の声で美佐子が叫んだ。それでも脚を床に下ろそうとした時、近づいてきた彼女の気配に顔を上げる。途端に、静まり返った診察室を貫いて破裂音が弾け、一瞬置いて、

頬にじわつと熱いものが染み込んできた。

平手打ちの痛みよりも、頬を打たれたショックに麻美が茫然と立ち竦む。

その前では、美佐子が白衣のポケットから、五センチ幅の医療用テープピングテープを取り出していた。

*

「あつ、いやっ」

美佐子が、麻美の淡いピンクのスカートをめくり上げると、診察台の上で、まだ肉付きが一步足りない小振りな尻が白いショーツに皺を刻んでくねった。

生理中だと言うのは本当なのだろう、長い目の太股の付け根に覗いている秘部の膨らみは、白い布の奥に秘められた柔肉以上にふつくと盛り上がっている。

「やめて、やめてください！ こんな変、変です！」

パニックの兆しを見せはじめている声で訴えてきた麻美が、テープによって十字に固定された手首を必死に振らせる。

「お願いです、せ……性器の検査なんて、そんなの！」

「あらあら、この子ったら。貴女の為を思っ言っあけてるのに」

応えながら、美佐子は、下腹から込み上がってくるものを押え切れず、自分の唇が深い笑みを浮かべたのを自覚した。

「違う、違います、そんなの嘘です！」

「さあ、どうかしら」

麻美のヒップに手を伸ばして、ショーツを引き剥がしていく。

「いやっ！」

こんもりとした尻房が、膨らみの合せ目をあらわにすると、麻美が拒絶の言葉を叫んで太股を深く縋り合わせた。

「あらあら、そんな事をするから、見なさい、ナプキンから経血が滲んできたわよ」

「えっ!」

太股の緊張が緩んだ。素早くショーツを引き下ろし、白いソックスを履いた足首から抜き取る。

もちろんショーツは汚れてなどいなかった、ただ、内側に貼られた生理用のナプキンが、新鮮な血の赤さで白い綿を彩っているだけだ。

「さあ、そんな恰好したら検査できないでしょう、お尻を上げるのよ」

見下ろして言うと、麻美が固く目を閉じて、肩を精一杯に窄める。そんな拒絶の仕草に

怒りが疼きだす。だがそれは、美佐子の欲情の兆しでもあった。

診察机の抽斗から、三十センチの物差しを取り出す。そのまま大きく振り上げ、空気がヒュンと鳴る程の勢いをつけて麻美の尻に打ち下ろした。

「ヒイツ！」

風船が破裂した時のような音と共に、柔らかな肉を打つ時の重い手応えが伝わり、苦痛の悲鳴が上がった。

三十センチの透明なプラスチック板の下で、痛みに耐え切れずくねっている尻と、白い肉の表面にぽつぽつと細かな赤い点の集合となつて浮き出してくる内出血を見ると、今度は子宮が、そして、秘部が熱くなった。

物差しを振り上げ、同じ箇所叩きつける。先程以上の甲高い悲鳴が響き、麻美の固く閉じた目尻に涙が滲んだ。

「結構強情なのね。ふふっ……、でもいつまで持つかしら」

「あああっ……、こんなの酷い、無茶苦茶です……」

「いい泣き顔なこと。ひよつとして、平尾先生に処女を奪われた時にも、そうやって泣いて、彼の気を引いたのかしら」

麻美の尻の膨らみをなぞって、物差しを這わす。

「早く言うとおりにしないと、この可愛いお尻、座れないぐらい腫れ上がっちゃうよ」再び振りかぶって打ち据える。五度目を数えた時、麻美が嗚咽しながら哀願した。

「します、言うとおりにしますから、叩かないで……もう叩かないで下さい……」

「じゃあ、やりなさいよ。ほら、早く！」

六度目の罰を与えてやった時、麻美が手首を括られた腕を支えにして、腰を持ち上げた。

「それじゃ駄目でしょ！ 脚も開くのよ。平尾先生にオネダリした時に使った所を、ちゃんと全部見せるのよ！」

麻美が再び固く目を閉じて、掲げた尻を開きはじめる。薄く経血をこびりつかせている内腿が開き、奥の秘めた部分が露出した。

「いい恰好ね、身分もわきまえないで、医者を誘惑するような雌犬看護婦にはぴったりだわ」

両手を拘束され、膝を立てたうつ伏せの姿勢で、ウエストの辺りまでめぐり上げられたスカートから、赤いみみず腫れが幾本も刻まれた裸の尻を剥き出しにされているナース服姿の美少女――

内腿の奥を覗き込んでやると、まだ処女を失って間もない秘部は乱れも少なく、太股の狭間でぼつてりと盛り上がっている二枚の柔肉は、表面に数本の恥毛を絡みつかせているだけで、奥の小陰唇をきっちり内側にたたみ込んでいる。

「まったくイヤらしい形してるわね」

疼いた嫉妬のままに、一本の縮れた毛を指先で摘んで、引き抜く。

麻美が喉の奥で短い悲鳴を上げ、ヒクンと震えた柔肉のあわいから、一筋の経血が垂れ落ちた。

「じゃあ、中を見せてもらおうかしら」

診察机から、用意しておいたクスコを取り、脅えた目を向けてきた麻美に見せつける。

「うふふつ……、ゴメンなさいね、あいにく経産婦用のサイズの物しかなかったの」

「そんな！」

逃げようとする麻美の腰を掴んで押え込み、秘部にペリカンのくちばしのような形をした金属の挿入部をあてがう。

「そうだわ、ワセリンを塗るのを忘れてたわね、でも、貴女なら平気だよわね」

柔肉の合わせ目にこじ入れ、丸みのついた先端で奥の膣口を探りあてる。じりつと押し込んでやった時、麻美が喉を苦しげに震わせた。

「あぐうっ！ い、いやっ……！」

「キツイ？ でも、平尾先生のモノが入ってきた時は我慢できたんでしょ」

「やめて……もう、やめて下さい……ごめんなさい、謝りますから、ごめんなさい」
涙をぼろぼろと零しはじめた麻美に、からかいの笑みを向ける。

「あら、貴女、何か謝らないといけないような事したの？」

手に力を込め、一気に突き入れる。

「ひぐうっ……！」

冷たいステンレスのくちばしを根元まで埋め込まれて、膣が引き攣り、丸い尻房の下端から覗いているクスコが、ヒクヒクと数度跳ね上がった。

「ふふつ……。そんなに痛かったかしら？ 可哀想にねえ、でもまだこれからよ、本当にツライのはね」

クスコの握りを掴み、くちばしを広げていく。

「あああつ……い、痛いっ……！」

まだ処女の趣きの色濃く残している膣口の、重く粘るような手応えが伝わり、赤くヌメヌメとした粘膜の壁が見えはじめ。

筒状になったステンレスの奥に、横に潰れた球を上下に重ねたような形をした子宮頸部が覗いた時、膣肉を押し広げている銀色の金属の表面に濃い朱色のしたりが流れた。

「あら、これって経血じゃないわね、うふふつ……もしかして裂けてしまったのかしら」
残酷な責め具と化した医療器具を更に開こうと、美佐子が手に力を込める。

「ああっ！ お願い、痛いの、本当に痛いんです、許してください、もう許して……！」

「我慢の効かない子ね。そうだね、こうしてやったら、少しは楽になるかしら」

麻美の浅く早い呼吸に合わせて跳ねているクスコを止めネジで固定し、太股の狭間に潜らせた手で秘部の上端に触れる。

探り当てた陰核を指先で摘み、包皮ごとクネクネとこねてやると、麻美の背中に小刻みな震えが走り、赤く腫れている尻がくねりだす。

「まだ若いクセして大きなクリトリスなこと。これなら、用意してきた物も充分に使えそうだね」

「ううっ……、何するんです、これ以上変な事しないで、もう許して、お願い許して……」

「その言葉、聞き飽きたわよ」

摘んだ包皮をずり下げ、中の肉の芽を剥き出しにする。

「この可愛い突起を縫合糸で縛ってあげるのよ」

「そ、そんな……」

驚きに言葉を詰まらせて、麻美の顔が色を失った。

「そんな事されたら、私……」

「感じちゃって仕方なくなるかしら？ でも、いいじゃないの、一日中楽しめるのよ」

白衣のポケットから、モノフィラメント製の番号糸を取り出す。一見、極細の釣り糸のようにも見えるそれを、美佐子が外科医の手付きで操り、麻美の股間に持っていく。

「あらあら、こんなに縮こまっちゃって」

指先で瑪瑙色の尖りを弾いてやると、麻美の太股がビクンと窄まった。

「敏感そうね、楽しみだわ」

作った小さな輪を、クリトリスに潜らせる。

「ああっ！ イヤっ！ しないで、そんな事、お願いしないで！ あっ——」

糸の両端をキュと引いた途端、麻美の声が甲高い悲鳴に断ち切られ、秘部が収縮する。張り詰めきっている膣口が引き攣り、また、経血ではない血を銀色の金属にしたたせさせた。

美佐子は、麻美の哀願の悲鳴を楽しみながら、更に二度糸を巻きつけ、色を失っている尖りから十センチ程を垂らして切断した。

「いいわね、勝手に外したら承知しないわよ。外して欲しかったら、また明日同じ時間に来る事ね、分かったわね」

美佐子が体を離れた途端、麻美が診察台に崩れ落ちた。

その、半ば髪によって隠された顔は苦痛の汗と涙に濡れており、唇からは、泣き疲れて掠れてしまっている荒い息が漏れていた。

秘部が痛かった。

多分裂傷になっているのだろう臍口もそうだが、取り分けクリトリスが辛かった。歩くたびに、いや、腰を少し動かしただけでも、自分でもロクに触れた事のない過敏な尖りに縫合糸が食い込み、体の中心を刺し貫かれるような鋭角的な苦痛が走るのだ。

翌朝、結局ほとんど眠れないまま出勤してきた病院のナースステーションの前で、麻美は遂に耐えきれず立ち止まってしまった。

周囲には、窓のカーテンを通って和らげられた朝日が充ち、その中を、入院患者が終えた朝食の食器を片づけている職員が、ドアを開けたままの保温カートを押して忙しげに行き来している。

駄目、こんな所に立ってたら変に思われちゃう。

麻美が気を取り直してナースステーションの中に入って行く。

部屋の中には、豆を挽いたものには及ばないが、それでも芳ばしいインスタントコーヒーの香りが漂っていた。見ると、早番だった数人の看護婦が、診察前のひとときを楽しもうと、テーブルに着いている。

コーヒーの匂いに少し慰められたような気分になった麻美だったが、それも長くは続かなかった。座っている看護婦の中の一人、寮で同室の薫が、彼女に気付いて椅子から立ち上がったのだ。

歩み寄ってくる途中で、薫の表情が曇った。

「どうしたの？ 何だか顔色が変わだよ」

しらっと言った彼女に、とっさに怒りの言葉が口から出ようとした——貴女が美佐子先生にあんな事、告げ口したから。

だが、周りには他の看護婦も居る、それに、まだ犯人が薫だと決まった訳でもない。

「う、ううん、別に……。ちょっと疲れてるだけ」

素っ気ない言葉を返し、努めて平静を装いながら、他の看護婦とは離れた椅子に向かう。腰を下ろした途端、何とか揃えて座る事ができた太股の奥で、また秘部が痛んだ。

思わず漏れようとしたうめきを押さえつけた時、入口の方から男の声が聞こえてきた。平尾先生だ。

部屋に居る看護婦が一斉に話しをやめ、きらめきを増した瞳で平尾を見つめる。

「今日もお早いですのね」

そう言ったのは、年嵩の看護婦だ。他の若い者は、隣の友人とテレ隠しのようになにか囁き合いながらクスクスと小さな笑い声を漏らしている。

「ええ、やっぱり新米は早く来て、受け持ちの入院患者のカルテを見ておかないとイマイチ不安でしょね」

平尾がはにかみの笑みを浮かべて、手を櫛の通った髪に持つていく。きつちりとアイロインが当てられている白衣の胸元には、薄いグレーのカッターと、プレーンノットに結ばれた青いタータンチェックのネクタイが覗いていた。

「分かりました、カルテですね。すぐにお出しします」

年嵩の看護婦が椅子から立って、カルテフォルダーに向かう。いつもなら若い後輩に任せるところそんな用事でも、彼女の足は軽やかだ。

「えーと……」

カルテを受け取った後、平尾がどこかワザとらしく聞こえる声で言いながら、部屋の中を見渡した。

「あつ、美樹崎君——」

恐れていた通り声を掛けられて、麻美は気後れを感じた。薫にも言われたように、寝不足の為にきつと酷い顔をしているだろうし、それに、習慣にしている朝のシャワーも、今朝は秘部の痛みの為に、満足には使えなかったのだ。

「診察前に悪いんだけど、昨日通院してきた吉本さんのカルテを持って診察室に来てくれるかな、ちよつと気になる事があるんだよ」

「はい、すぐに」

小声で応えた麻美の口調にも気づかなかったのか、平尾が優しい笑みを向けてから、ナースステーションを立ち去った。

*

「ぎゃっー！」

言われたカルテを持って平尾の診察室に入った途端、体をぐいっと引かれて麻美が短い悲鳴を上げた。

次の瞬間、腰に腕が巻きつき、顔の前には白衣の胸元から覗いているタータンチェックの青いネクタイがあった。

「ごめん、びっくりさせちゃったかな」

腋を通ってきた手に、背中を抱かれた。

驚きが醒め、自分を見下ろしている彼の微笑みを見ると、体の深い所から暖かいものがじーんと湧き上がってきた。

「い、いいえ……」

顔が赤らみ、火照っていくのが分かる。

平尾の手が、背中を滑り降りてスカート下のピップに触れた。

「あつ、先生、だめ……」

——今は嫌、シャワーもちゃんと浴びられなかったし、髪の毛だって……。それに、それにもし、もしアソコに触れられて、気づかれでもしたら……。

「大丈夫、まだ誰もこないよ」

安心させるように言った平尾が、腰を強く引き寄せてくる。

「いやっ！」

スカートの中に手が潜り込んできた時、麻美は、彼を突き飛ばして体を引き離れた。

「そうか、悪かったよ」

短い沈黙の後に言った平尾の、傷ついている顔を見上げると、後悔の念が心を曇らせた。

「あの、私……」

何と言ったら良いのか分からなかった。いっそ、昨日の事を打ち明けてしまいたくなかった。

でもそんな事できない、美佐子先生にあんな事をされてしまったなんて、絶対、平尾先生には知られたくない。

「いや、いいんだよ、僕が悪かったんだ。あんまり付き合いも無かった君といきなりあんな関係になってしまったからね、ちよつといい気になってたのかな」

違う、そうじゃなくて！

だけど、やっぱり言葉が出てこない。

「そうそう、吉本さんのカルテを持てきてくれたんだっただね。ありがとう、机に置いたら戻ってくれて構わないよ」

急によそよそしくなった平尾が、麻美に背を向けた。

鼻の奥から熱い痛みが突き上げてきた、今、少しでも気を緩めてしまうと、本当に声を上げて泣き出してしまいうだろう事は自分でも分かっていた。

「……失礼します」

ようやくそれだけを言う事ができ、麻美が診察室から出ていこうとする。と、その時だった。

「平尾先生、美樹崎さんがこちらに——」

入口のカーテンを引き開けて、美佐子が顔を覗かせた。

驚きのあまり足がとまり、身が竦んだ。そんな麻美を見た美佐子が、ルージュの施された唇を冷笑に歪める。

「やっぱりここだったのね」

美佐子が、振り返ってきた平尾に顔を向けた。

「先生、美樹崎さんをお借りしてもよろしいですか？」

「ええ、もう用事は済みましたから構いませんけど……。どうかしたんですか？」

「いえ、診察の手伝いしてもらおうと思ひまして」

意外な言葉に、麻美が美佐子の横顔を凝視する。今日的美佐子の担当看護婦は、薫のはずなのだ。

「私の担当看護婦が急に用事ができたとかで、昼まで休みが欲しいと言ってきましたね。最近の若い子は仕方ないですわ」

「ああ、そうなんですか、はい。じゃあ美樹崎君、頼んだよ」

あつさりと言った平尾の態度に、麻美はもう何も言う事ができなかった。

*

美佐子に強要されて、スカートの中からショーツを下ろしながら、麻美はどうとう涙を堪えきれなくなった。

場所は昨夜と同じ外科診察室で、彼女の前では椅子に座った美佐子が、例の小猫を虐める子供のような目で見上げている。

「あらあら、泣いたりして、薫と交代できてそんなに嬉しいの」

薫……。そうだ薫だ。

同室の看護婦の名前を聞かされて、麻美が一瞬手をとめた。昨日の今日で、しかも美佐子先生を担当する日に、急に用事ができるだなんて都合が良すぎる。

じゃあ、やつぱりあの子が犯人なの……。

そう思うと、日頃の薫の行いが次々に脳裏を過った。赴任してきた平尾を初めて見た日のはしやぎ振りや、彼を担当する日はいつもよりもずっと長く鏡の前に座っていた事……。

薫だったんだ、あの子、私と平尾先生の事を嫉いて、それで――

悔しかった、胃がギュと締めつけられて吐き気がするぐらいに悔しかった。そして、そんな事が原因で平尾に誤解されてしまった事が、悲しかった。あまりに悲しすぎた。

「いつまでめそめそしてるの、さっさと脱いでしまいなさいよ、それとも糸が気にいってを取って欲しくないのかしら」

追い打ちをかけて、美佐子の嘲笑が飛ぶ。

悔しさと悲しさに怒りが加わって、心のはち切れそうになる。

「せ、先生もよ……」

顔を上げて言った麻美の押し出すような口調に、美佐子が訝しげに顔を顰めた。

「——先生も薫と同じなのよ、嫉んでいるのよ、嫉妬してるのよ！ 私の事嫉妬して、それでこんな無茶苦茶な事するのよ！」

美佐子が鼻で笑い、蔑む目で見返してきた。

「それがどうしたって言うの。アンタみたいな女、このぐらいの事されて当然よ！」

履いた黒のバックバンドをカツンと鳴らして、美佐子が立ち上がる。麻美のスカートに手を突っ込んで、垂れ下がっている縫合糸を引いた。

「ひっ……！」

腫れたクリトリスを強く擦って糸が外れ、声も上げられない程の激痛が走った。

膝が崩れる。だが、美佐子はそれさえも許さなかった。麻美の腕を掴んで引き起こし、そのまま、先程まで自分が座っていた診察机に向けて背中を突き飛ばす。

半ば下ろしていたショーツに足を取られ、よろけた麻美が机に手をつく。背後から近寄ってきた美佐子が、彼女のスカートをめくり上げた。

内出血の跡が残っている裸の尻とじんじんと疼いている秘部を、冷たい外気が舐める。

「まったく、何も分かつちやないクセに生意気な事を言っつて、本当にバカな女よ」

「あうっ！」

いきなり二本の指が、柔肉を歪めて膣口に突っ込まれてきた。

「このイヤらしい中のお肉を掻きむしって、ズタズタにしてあげようか？」

鉤状に曲がった指が膣孔を押し広げ、固く鋭い異物が上側の肉壁に浅く食い込んできた。すすり泣きながら、麻美が大きく顔を振る。

「そうよね、また平尾先生に使ってもらわなきゃいけない大事な所だものねえ。でも、中に傷があった方がよおく擦れて、先生は感じてくれるかもわよ」

食い込んだ爪がジリツと動く。

「いや！ ああっ……いやっ……！」

「そう、アンタってバカなだけじゃなくて自分勝手な女なのね。じゃあ、ここはどう？」
えっ？

今まで意識した事もなかった所に押し当てられてきた太い指——親指だろう——の感触に、麻美が腰を捻って尻房を窄めた。

「もう子供じゃないし、知ってるわよね。こっちの穴も男の人に使ってもらえるのよ」
ぐりぐりと肛門をこねまわし、固く閉じた肉の輪をこじ開けてきた指が、鈍い痛みと共に直腸に押し込まれてきた。

麻美が唇を噛み、机を握り締める。

前を蹴る指が奥に進んで子宮を探り当てると、肉壁を挟んで三本の指が動きだした。

膣孔の内側を擦って前後し、子宮をまさぐっている二本の指の味わいと、排泄器官を弄

られる恥辱の中に混じる、生まれて初めて感じる奇異な異物感——
そして、ズキンズキンと心臓の鼓動に呼応して疼きながらも、自分の存在を誇示して頭
をもたげはじめているクリトリスの甘い痛み。

「ううっ、くうんっ……」

耳ではなく直接内臓に伝わってくる、体の内側を搔きまわされる時のグチュグチュと湿
った音を聞きながら、麻美は、唇から漏れた喘ぎの熱さを自覚した。

「ほら、やっぱりカンジてきたわね。いやらしい女——」

濡れた声で耳元に囁いた美佐子の爪が、膣と直腸を隔てる肉壁を引っ搔いた。

「ひいっ！」

喉を痙攣させて、麻美が机に突っ伏すと、美佐子が体を離す。

「肛門で感じるようなヘンタイ看護婦には、まだちょっとお仕置きが必用だよわね」

振り返った麻美が見たものは、茶色の遮光瓶からグリセリンを浣腸器に吸い上げている
美佐子の愛液に汚れた手だった。

【3】

病院の中は静まり返っていた。

常夜燈だけが灯された薄暗い廊下に、時折聞こえてくるものと言えば、病室から聞き取
れない雑音となって漏れてくる、消し忘れたラジオの深夜放送ぐらいだ。常に病院中に漂
っているオスバン液の匂いも、今はどこか薄れているように感じられる。

麻美は、素足に履いたスリッパの足音に注意しながら、薬品庫に向かっていた。

朝の外科診察室で、美佐子に秘部と肛門を舐られた後に受けた浣腸が、まだ彼女を苦し
めていた。

普通なら最低でも半分の濃度に薄めて使用されるグリセリンを原液で注腸されたまま、
肛門にゴム栓をねじ込まれ、昼の休憩時間まで勤務させられたのだ。

幸い午後には解放されたが、内臓の調子はすっかり狂ってしまい、食事もできなかつた
にも拘らず、今でも胃と腸が熱っぽく、鈍い疼きを訴えていた。

夜になり、一旦はベッドに入りはしたものの、結局寝つけず、彼女は、内臓の不快感を
軽減してくれる薬を求めて病院にやってきたのだ。

運よく、今夜の当直看護婦の薫にも遇わず、薬品庫や病理検査室、CTルーム等の施設
がある階にまで昇ってきた時だった。

声が聞こえた。

——いや、それは声と言うよりも、掠れた息遣いの音で、辺りがこれほど静まり返って

いなければ、到底気づかなかったぐらいに微かなものだった。

でも、これって……。

どこか苦しげで、だが、決してそうではない女の喘ぎと、そこに重なる男の低いうめき。

好奇心に駆られて、麻美が、声の聞こえてくる病理検査室に近づいていく。

えっ？

ある程度は予想していたとは言え、やはりドアの窓から覗き見た光景に、彼女は驚きを隠せなかった。

最初に見えたものは、黒いバックバンドだけを履いた女の裸の脚だった。片足は床につけ、足首に赤いショーツを絡ませているもう片方の脚は、様々な検査器具が置かれた検査机に乗せている。

だが、それ以上に彼女を驚愕させたものは、床に跪いて、女の鈍角に開いた太股の奥に顔を埋めている、グレーのカッターを着た男の姿だった。

まさか……まさか、まさか！ 嘘、こんなの嘘、嘘よっ！

*

「だけど貴方って、こう言うのが本当に好きよね」

乱れた息混じりの声で言った美佐子が、口元に嘲笑を浮かべた。

「でも、この病院に来るまで何も知らなかった僕に、みんな教えたのは先生じゃないですか」

平尾が床から応え、愛液の糸を引いている舌で彼女のクリトリスをまさぐる。

「うふふっ……、そうだったかしら。さあ、もっと舐めて私を感じさせるのよ」

命令口調で言った美佐子が、股間に寄せた両手の指で秘部を広げる。薄い肉付きの大陰唇が左右に捲かれて、ヌメリをたっぷりと乗せた奥の粘膜が剥き出しになった。

平尾が更に深く顔を押しつける。頭を上下に揺すりはじめると、美佐子の太股がヒクヒクと細かく跳ね、薄笑いを浮かべていた顔が快楽に歪んだ。

「ああっ……、巧くなったわね。最初の頃とは大違いだわ……」

「だって……先生に厳しく舐られましたから……」

「そうそう、舐って言えば、麻美はもうすぐかもよ」

「へえ、やっぱ凄いな。先生に言われて、あの看護婦を抱いてやってから、まだそんなに経ってないのに」

「アンタに誘われたその日にやらせちゃうような子だもの、簡単なものよ。後二、三回、恥ずかしい所を徹底的に虐めてやったら、すっかり諦めて従順になるでしょうね」

平尾が舌を使いながら、美佐子の腰に腕をまわし、後ろから掴んだ尻肉を揉みしだく。
「あぁっ……、先生のお尻って最高だ……」

「うふっ……、後でもっとたっぷり味あわせてあげるわ。だけどあの子もバカよね。今朝なんかさ笑っちゃった、涙ぼろぼろ零しながら、私が嫉妬してるだなんて言い出すのよ」
「何せ処女でしたからね、何も分かつちやいないんですよ。でも、楽しみだな。僕だって、たまにはプレイの時に女の子を痛めつけて泣かせてみたいものな」

「二人でよ、二人でたっぷりヤッてやるのよ。でも、分かてるんでしょうね」
美佐子が股間から手を離し、平尾の頭を強く秘部に押しつける。

「二度とあの子を抱いてやったりしたら承知しないわよ。あの麻美はペットにするんだから、私たちが虐めて泣かせて、楽しむ為のペットにね」

「わ、分かっていますよ……。僕にとつて女性は先生だけなんですから……」
口を塞がれた平尾が苦しげに言うと、満足そうな薄笑いを浮かべた美佐子が、腰を大きくグラインドさせはじめた。

「もつとよ、もつと奥よ、もつと奥まで入れなさい。あぁっ……、そう、子宮も、子宮もよ、子宮も舐めるの！」

美佐子の吐く息のテンポが早まり、大きく開いた唇の端から一筋の涎が垂れる。
「舌よ、舌を動かすの、もつと大きく、あうっ！ もつと、あぁっ！ もつとっ！」
部屋の中に美佐子の掠れた喘ぎ声が広がり、そこに、ぴちやぴちやと鳴る舌使いの音と、愛液にぬめった秘肉をすすり上げる時の、ズルッと濡れた淫音が交差する。

平尾が片手を美佐子の尻から離し、自分のスボンのファスナーを引き下ろした。弾け出てきた淫茎を掴み、粘液にギラつき、青筋を浮かして節くれ立っているそれを、強く扱きはじめた。

「勝手に出しちゃ駄目よ、私がイクまで待つよ」

平尾の髪に埋まった指が色を失って鈎状に曲がる。振る腰の動きが激しくなり、豊満な尻が踊る。

開いた目の奥で瞳が焦点を無くした。
「うぐうんっ！」

美佐子が、絶頂の声を喉の奥から振り絞る。

平尾が早めていた手の動きを止め、淫茎を握り締めた。亀頭が膨張し、獣のようなうめき声と共に進った白濁は、美佐子の履いた黒いバックバンドにまで飛び散った。

「さあ、次は貴方の大好きなもう一つの所よ……」

絶頂の余韻を色濃く留めている声で囁いた美佐子が、体を後ろ向きにして机に手をつく。床を這い寄ってきた平尾が、彼女の突き出した尻房を片手で分け、その狭間に深く顔を埋

めた。

美佐子の肛門を舐める平尾のもう片方の手は、精液の残滓を垂れ流している淫茎を再び擦りはじめていた。

【4】

心は冷え切っていた。小さく凝り固まって、石ころのようになって、虚ろな胸の真ん中にぽつんと佇んでいるようだ。

だから、もう、薫を誤解して憎んでいた事も気に病まなくなつたし、今日もまた診察室で美佐子に手酷く罵られた時も、涙さえ出なかった。

麻美は、花柄のカバーが掛けられた、一般の病室に置かれているものよりも大きめのベッドに腰を下ろして平尾を待っていた。

ここ一ヶ月程、空き部屋になっている特別病室は、時折、雑役婦の掃除の手が入っているとは言え、やはり室内の空気は淀んでおり、窓から射す夕方の陽の中に、微細な埃の粒子を漂わせている。

ドアが開き、平尾が、廊下の様子を素早く窺ってから部屋に入ってきた。

「どうしたんだい、急にこんな所に呼び出したりして？」

平尾が、ベッドの麻美に目を止めて、いつもの屈託のない笑顔を向けてくる。

だが、正体を知ってしまった今には、その整った容姿の中に小狡い小心者の姿が透けて見えてしまう。

どうしてこんな男に夢中になってしまったんだろう……。

昨夜から幾度も心を過つた後悔を押し殺して、麻美は、精一杯悲しそうな表情を作った。

「実は、美佐子先生の事なんです……」

その言葉に、平尾の表情が崩れ、笑みが口元だけのものに変った。

「美佐子先生がどうかしたのかい？」

「あの先生、とっても酷いんです……」

ナース服のボタンを外し、前を開く。フロントフォックのブラを取ろうとした時、平尾が慌てて言った。

「美樹崎君、いったい何をやる気なんだ」

「ごめんなさい、私も恥ずかしいんですけど、こんな先生にしか見せられないから」

「そ、それは……」

分かれたブラから乳房が零れ出ると、平尾の視線が、片方の乳首に集中した。今朝、美佐子に二本の注射針で十文字に貫かれ、そのまま放置されている乳首だ。

「美佐子先生だったら、お仕置きだって言っつて、こんな事なさるんです……」
麻美の狙い通り、平尾の目が欲情の色合いを帯びる。

「抜いて頂けませんか？ 恐いんです、自分で取るのが怖くて……」

ああ、と上ずった声で答えると、平尾が屈み込んでくる。乳房の下側に手をあてがい、淡い色の尖りを貫通している注射針を摘んだ。

「あつ、痛いっ！」

「おっと！ ごめん」

離そうとした手を掴み、乳房に押し当てる。驚いて見上げてきた平尾に顔を寄せ、熱い囁きを吹き掛ける。

「いいんです……先生なら。痛くしてくれたっつて、いいんです……。いえ、本当はして欲しいのかも……」

「美樹崎君、それっつて……」

「変ですよ、でも本当なんです。美佐子先生に虐められてる時だっつて、これがもし先生ならカンジてしまうかも、なんて思っっちゃっつて……」

「そ、そうなのかい……」

平尾が乳房を掴んで、再び注射針を抜き始める。傷口が痛んだが、その喘ぎをワザと聞かせてやると、平尾が更に顔を寄せてきた。

「舐めて……。疼いて堪らないんです……」

注射針を抜かれた後の、再び滲んだ薄い血で飾られた乳首に舌先が触れた。

「あんっ！」

半ば本気の声が漏れた時、平尾がむしゃぶりついてきた。

「駄目っ、駄目です、先生！」

肩を掴んでいる手を振り解こうとするが、やはり興奮している男の力は強く、ベッドに押し倒されてしまう。

「どうしてだ、このままで済まないぐらい、君だっつて分かっつてるだろう！」

「そうじゃないんです、下も……」

「下？」

「はい……。アソコも虐められて……。だから、それも先生に見てもらいたくて」「いったい何をされたんだ？」

欲望にギラついている目に好奇心が加わり、平尾が力を緩めた。

麻美が上半身を起して、スカートをたくし上げる。ショーツに指を掛けた時、躊躇いに手が止まった。

「恥ずかしい……」

本音が漏れてしまった。

でも、やらなくっちゃ。ここでやらなかったら、平尾先生を、この男を、誘惑できない。腰を浮かして引き下ろし、脚を広げた。

スカートを持ち上げてM字型に広がっている太股の奥に、平尾の視線が食い入ってくる。

「分かりますか？　ここ、ほら、クリトリスがまだこんなに腫れちゃって……」

指先で柔肉の上端を押すと、包皮の中からプツリと赤い肉の芽が露出した。

「縫合糸を巻かれてたんです……。でも、それだけじゃなくて、今朝なんて……」

息を詰めて、肛門を引き締める。内腿に細い臍が浮き上がり、秘部全体がヒクツと震える。膣壁を擦って、奥から固い物が滑り出てくるのを感じる。

「あああ……」

双曲線を描いて合わさっている肌色の柔肉が狭間を広げ、奥の赤く濡れた薄肉が、にちやりと左右に分かれた。

「おっ、こりゃ……!!」

ぬめり光った膣口から、黒い異物が覗いた時、平尾の喉仏がゴクリと上下した。

「うっ、んんっ!」

最後に強く引き絞ると、自分でも驚く程の愛液の糸を引いて、ゴム製の小型ディルドウがヌルツとベッドに吐き出されてきた。

「練習だつて言われるんです、次はもっと太いモノを入れっぱなしにして、膣を拡張してやるって仰るんです……」

自分の体温を吸って生暖かくなっている淫具を取り、平尾に示す。

「でも、ほら、こんなに濡れちゃってる。恐いんです、こんな事されて感じちゃうような子にされてしまったら、先生に嫌われちゃうって思って、とつても怖いんです……」

「そ、そんな事ないよ、ステキだよ、そんな君つとつてもステキだよ!」

今にもむしゃぶりついてきそうな平尾の口調に、麻美が内心でほくそ笑む。

「嬉しい。とつても嬉しい……」

「麻美君!」

「あっ、待って」

平尾を押し止めて、ベッドから降りた麻美が床に膝をつく。目の前には、ファスナーを弾き飛ばすかのような勢いで盛り上がっているズボンの股間があった。

「男の人って、興奮したら早く終わっちゃうんでしょう。先生には、ゆっくり楽しんで欲しいんです、だから、最初は……」

両手を膨らみに寄せて、摘んだ留め金を下ろす。湿っている下着を開くと、文字通り、張り詰めきっていたモノが飛び出してきた。

「あつ……!」

勃起した淫茎をこれだけ間近にするのは初めてだった。固く握り締めた拳のような男の肉塊と、そこから漂ってくる匂い――

本来なら、悪臭に近いはずの香りを感じた時、子宮が疼いた。さつきひり出したディルドウを、秘部が懐かしんでいるような感覚が全身に伝わっていく。

怖じ気が薄れた。少なくとも自分よりかは、ずっと経験のある平尾を上手く籠絡できるのかと言った不安が消えた。

「最初はお口に下さい……私のお口で、いっぱい気持ちよくなって……」

そんな台詞も抵抗なく口にできた。囁いた唇から舌を伸ばして、亀頭を舐め上げる。トロツとした牡の粘液の味が広がり、それを綺麗に舐め取っていく。

上で平尾がぐもったうめきを漏らした。

「麻美君、感じるよ、凄く感じる……」

「じゃあ、こんなのは？」

唇を開いて、亀頭を包みこむ。横に張っているエラの裏側や、膨張した肉の継ぎ目にまで丹念に舌を這わせ、先端の浅い溝を舌先で押し分けて、奥の小穴を抉る。

「くっ、凄い……!」

平尾が麻美の頭を両手で掴んで、引き寄せようとした。

「駄目!」

キツイ口調に平尾が手を離す。

「私がして上げます。私が気持ちよくしてあげますから、じつとして……」

唇が根元に触れる程深く啜え込み、そのまま吸い上げながら、ゆっくりと顔を引く。

「うううっ……最高だっ……!」

平尾が掠れた喘ぎを吐き、腰を震わせた。味わう快楽に情けなく崩れている顔を見上げた時、麻美の中に淫らな悦びが湧き上がった。それは、男を翻弄する悦びだった。

「どうして欲しい？」

「もつと舐めて、それに……下も頼むよ」

「うん。」

口を開いているファスナーに手を差し込んで、縮こまっている垂れ袋を摩る。

平尾のうめきと共に、淫茎がヒクンと跳ね上がり、先端から透明な粘液が長い糸を引いて垂れ下がった。その糸を濡れた舌先で受け止めて、麻美が再び亀頭を頬張る。

唇と舌と手を微妙に使いながら、膝を横に滑らせて太股を開く。逆の手を奥に差し入れると、そこはもう熱く濡れ、ぷくぷくと膨らんだ柔肉は、内側の薄肉をはみ出させていた。

指を挿入し、それでも足りず二本目の指を押し込んで、揃えた指で中を掻きまわす。走

った快感に膣孔が蠢き、下がってきた子宮のコリツとした固い感触が指先に当たった。
「くうんっ……んっ、んっ、あうっ……」

淫茎を翳る唇の端から漏れる途切れ途切れの喘ぎに、濃いとろみにまみれた柔らかな膣肉と指が擦れ合う時の、ぐちゅぐちゅと湿った音が重なった。

堪らなくなったのだろう、平尾が、淫茎を掴んで激しく扱きはじめた。

「駄目って言ったでしょう!」

口を離して叫んだ麻美を、平尾が見下ろしてくる。視線が絡まった。平尾が目を逸らす。

「ごめん……。つい……」

勝った。

もうこの男は私のものだ。私はあの女に勝ったんだ。

歓喜が虚ろな胸を満たした。欲情が膨れ上がり、秘部を弄る指の動きが大きくなった。

「ねえ……先生、そんなにイキたいの?」

「ああ、こんな気持ち、初めてだよ」

「じゃあ……約束してくれる?」

「ああ、約束する、君の事、大事にするよ」

「ううん……、そうじゃないの」

ズボンに差し込んでいる手で、垂れ袋を優しく撫でる。

「美佐子先生にこれから仕返ししに行きたいの、あんな事されたんだもの、復讐してやりたいの」

「えっ?」

「先生もきつと楽しめるわ。だって、二人の女を好きなように虐められるんだから」

一瞬、力を失いかけたかと思っただ淫茎が、再び張り詰める。その単純な男の生理に、麻美は忍び笑いを浮かべた。

「絶対上手いくわ、先生が協力してくれたら、方法なんていくらでもあるもの」

爆ぜる寸前に膨れ上がっている亀頭に軽く舌を触れ、知ったばかりの男のポイントをくすぐる。

「ううっ! ああ、分かった、分かったよ」

「うふふっ……。嬉しい。でも、今はまだオアズケよ」

「えっ、そんな……!」

「だって、その方が先生だって、楽しみが先に伸びて嬉しいでしょう」

切なげな平尾の顔を見上げる。

自分は今きつと、あの時の美佐子のような、小猫を虐めて喜んでいる子供の目をしているんだろう、麻美はそう思った。